

質の高い大学教育推進プログラム 実施状況報告書

大 学 等 名	津田塾大学		
取 組 名 称	社会貢献は書く力とプロジェクト推進力から		
申 請 区 分	教育方法の工夫改善を主とした取組		
取 組 期 間	平成20年度～平成22年度（3年間）		
取 組 学 部 等	学芸学部	取組担当者	高橋 裕子
W e b サイト	http://twc.tsuda.ac.jp/		
取 組 の 概 要	円滑にコミュニケーションを図る力量は、あらゆる仕事に必須の要素であり、その基盤となる日本語力強化が産官学各界で指摘されている。本取組では「リーダーシップを発揮する女性人材の育成」を目指し、「ライティングセンター」と「学生主導型プロジェクト」を両輪とした実践的総合キャリア教育を推進。「書く力」の強化と、学生主導型プロジェクトの実体験を通じたリーダーシップスキルの養成を目指す。		

1. 取組の実施状況等

①取組の実施状況 【1ページ以内】

(1)取組の実施体制（マネジメント体制、教職員の体制、大学としての支援体制）

本取組の運営は、学長室会議のリーダーシップの下、「キャリア教育推進タスクフォース」が母体となって行った。タスクフォースは各学科1、2名の専任教員とライティングセンター特任教員、教務課研究支援室、学生生活課、交流館の職員ら10名で構成。学科を横断し、全学を挙げて取り組んだ。卒業生とのネットワーク強化を担当する学生生活課・交流館とも連携することで、学生の学習指導だけでなく、学生主導型プロジェクトの実施や進路支援も行った。ライティングセンターの実施体制は特任教員2名、個別相談を担当するチューター3名、事務室員2名であった。

(2)取組の実施計画に掲げた内容

①取組の全体スケジュール及び各年次の実施計画

本補助事業は、平成20年度を初動期間、平成21、22年度を本格的実施期間とした。

平成20年度は、「キャリア教育推進タスクフォース」を立ち上げ、3年間の実施計画の詳細を決定した。「ライティングセンター」に特任教員2名を配置し、各講座・講演会を開催。情報を共有する「マイ・ライティング・ポッド」も構築した。「学生主導型プロジェクト」は6件を実施した。また卒業生とのネットワークを活用し、学生へのキャリア指導に生かすため、同窓生を交えて情報交換を行った。評価委員会を組織し、内部評価と外部評価の総合検証を自己点検と併せて実施した。

平成21年度は、「ライティングセンター」、「学生主導型プロジェクト」の活動を継続して実施した。新たに正課授業科目「日本語ライティングA～F」を開講。ライティングセンターでは学生の個別指導を本格的に始動し、レクチャーシリーズ「書くということと私」、「翻訳・通訳に関するライティング」、講座「日本語ライティング講座」を初年度より開催数を大幅に増やして実施した。評価委員会による検証も行った。

平成22年度は、21年度に実施した講演会、講座などを継続・発展させて開催。新たにレクチャーシリーズ「女性のリーダーシップから学ぶ」を4回実施し、各回60～100名が参加した。「学生主導型プロジェクト」は15件実施した。本取組の最終評価を実施するため評価委員会を開催し、効果のあがった活動等の継続を検討した。

②取組に参加する教職員と学生の数等

本取組の対象者は全学の学生（2814名）、教職員（146名）である。

講演会、講座、学生相談などの参加・利用者は3年間で延べ2033人であった。

(3)社会への情報提供活動（Webサイトの活用、新聞、テレビ等のマスコミの活用等）

大学公開Webサイト、ライティングセンターのWebサイトで取組の告知に努め、活動状況をこまめに発信した。講演会・講座等は開催が決まり次第、案内を学内外へ配布、プレスリリース（市報、新聞社10社）も行い、協定校（TAC）や地域住民にも参加を呼びかけた。本取組に関しては読売新聞や毎日新聞から取材を受け、「学生の文章力向上作戦」という見出しで写真付きの記事になったほか（読売新聞、2009年5月29日）、「IKUEI NEWS」49号（電通育英会、2010年1月20日発行）では「コミュニケーション力 飛躍の鍵は『書く力』にあり」という特集記事で2ページにわたって紹介され、ライティングセンターを利用した学生2名のコメントも掲載された。

## ②. 取組の成果 【1 ページ以内】

「学生主導型プロジェクト」は企画から運営までを学生自身の手で行うことで、交渉力やプレゼンテーション能力などキャリアに直結するスキルの向上を目指すものであった。3年間の取組で21件のプロジェクトが実施され、延べ50人の学生が参加した。活躍する卒業生をロールモデルとした講演会の実施や、職業に直結したイベントレポートの作成など、学生自身が自らと社会との関係を具体的に把握し、大学で学ぶこととキャリアとの連関をより深く認識することができた。座談会の講師として招いたテレビ局勤務の卒業生から刺激を受け、テレビ局への就職に繋げた学生もいた。

「ライティングセンター」では、学生主導型プロジェクトのレポートのほか、正課授業のレポート等の文章作法の個別指導を実施した。特任教員および大学院生チューターは優れた「読み手」に徹し、添削するのではなく、学生の気付きを促した。相談者数は3年間で延べ400人。利用学生に行ったアンケートでは、回答者全員がチューター・教員の対応に「満足」し、「今後もセンターを利用したい」と答えた。「質問を繰り返してもらうことで、文章や内容をブラッシュアップすることができた」「自分の考えがより明確になった」などの感想が寄せられ、学生の書く力の強化、「自立した書き手」の養成に繋がった。個別相談は評価委員からも最も高く評価された。

また、マスコミ志望の学生数名が自発的にグループを作り、特任教員による作文・小論文指導や「マイ・ライティング・ポッド」を利用した学生同士の情報共有を行った。テレビ局や出版社への就職に繋がるなど、就職活動にも貢献した。

正課授業として開講された「日本語ライティングA～F」を受講した学生の授業評価は総じて高かった。教員との距離が近い、最大20名という規模で「書く」ことに特化した授業を展開できたことは、「書く」スキルだけでなく、学生の意識の向上にも繋がった。また、元新聞記者や専業主婦を経て研究者になった人など、異なる背景を持つ教員が指導することで、学生がキャリアを考えるうえでの多様なロールモデルを提供することができた。

レクチャーシリーズ「女性のリーダーシップから学ぶ」は、最終年度に4回実施した。極めて顕著な活躍をしている女性、参入するのが困難な分野の道を切り開いた女性を講師として招き、リーダーとしての資質と働く姿勢を学ぶ有用な機会を設けることができた。「書くということと私」講演会では、毎回、「書く」ことに関わる様々な専門分野の講師を招き、「書く」ことがキャリアとどのように結びつき、大学で学ぶ「書く」力が将来のキャリア・パスにいかに関わっていくかを示すことができた。また、学内編としてタスクフォースの教員が講師を務める講演会も授業時間内に実施。「書く」ことが専門分野とどのように関係しているのかを学生に直接伝える機会となり、少人数のグループで活発な質疑応答を行った。実施した教員にとっては、FD (Faculty Development) としての機能も果たした。

「日本語ライティング講座」は作家、編集者、歌人、映像翻訳家らを講師に、第一線のキャリア教育として大きな役割を果たした。授業時間外の開催であったにも関わらず、キャンセル待ちが出るほどの人気となり、学生のニーズにあった講座を提供できた。「毎回、新しい発見があった」「現場の声を聞けてよかった」といった感想が学生から寄せられた。

### ③. 評価及び改善・充実への取組 【1 ページ以内】

取組に対する評価・改善は、(1)学内者（学生、教職員）による内部評価、(2)学外者による外部評価、(3)タスクフォースによる自己評価、の3つの視点で実施した。

評価委員として、外部評価委員（他大学教員）1名、内部評価委員（タスクフォースメンバー以外の教職員）4名を選任。タスクフォースメンバー（10名）の自己点検とも併せ、各年度の評価を実施した。評価で指摘された改善点は次年度の事業に反映させ、最終年度は3カ年の取りまとめ評価、および各取組を点数化しての評価も行った。

ライティングセンターの「個別相談」はセンターの要になる活動、かつ「最も学生と近く、学生の成長を間近に見ることができる部分」（タスクフォースメンバー）として、学生、評価委員双方から高い評価を得た。最終年度の「個別相談」利用者数は前年度1.7倍の増加が見られ、「5回以上」訪れる学生も多かった。「自分の考えを引き出してもらった」という類の感想が多く、『『自立性のある書き手を育てる』という目標が実現されている何よりの証』（評価委員）となった。

「日本語ライティング講座」は毎回実施した学生アンケートをもとに、学生のニーズに沿った講師や内容を検討。一律4回開催とするのではなく、3回の講座や6回の講座も設け、バラエティーに富んだ内容にした。評価委員からは「理系学生の参加が少ない」との指摘があった。そこで、他大学で理系学生へのライティング指導を経験した教員からヒアリングを行い、理系学生へのアピール法を検討した。講座の内容を工夫し、募集のチラシに理系学生の参加を促す文言を加えるなどした結果、いくつかの講座に情報科学科の学生も参加した。アンケートを見ると、参加者の満足度はどの講座に対しても高く、学生の学ぶ意欲を引き出した。少人数の講座を複数回実施することで、講師との距離が近くなり、キャリアの話や相談なども活発に行われた。キャリア教育としての成果も評価委員から高く評価された。

レクチャーシリーズ「書くということと私」「女性のリーダーシップから学ぶ」は、多彩な講演者に登壇してもらえ、キャリア世界の広さと奥の深さを学生に伝える良い機会となった。学生や一般参加者のアンケートでは「大変良かった」と答える人が大多数に及び「良かった」が続く。「あまり良くない」「良くない」と答えた人は一人もいなかった。

正課授業科目である「日本語ライティングA～F」では「書く」ことに特化した授業を最大20名という少人数で単位科目として提供することができた。授業アンケートには「文章を書くことが好きになった」という記述があり、書くことに積極的に取り組む学生を増やすことができた。

「学生主導型プロジェクト」は意欲的な企画があったものの、学生の参加を大幅に増やすことができなかつた点が課題として指摘された。

平成20年度～平成22年度全体の評価は各委員に5段階で数値化してもらった。「学生主導型プロジェクト」は低めの評価に終わったが、ほかの取組に関しては4～5の評価が目立ち、「本取組全体の評価」でもほとんどの委員が4以上の評価をつけた。

#### ④. 財政支援期間終了後の取組 【1 ページ以内】

基本的に、正課授業科目の実施、ライティング一般に関する学生相談、講演会などは規模の縮小こそあるものの財政支援期間と同様の内容を実施する。つまり、ライティングセンターの多様な活動は、すでに本学の教育・実践に根付き、学生のセンターへの自発的な相談はもとより、教員からライティングに問題がある学生の送り込みも受け、ライティングを生業とする職業を目指す学生のための自主ゼミの実施など本学にとって不可欠なものとなっている。その結果、平成 23 年度は、大学の自主財源から財政支援を受け、予算規模こそ削減されるものの継続的に行われることとなった。平成 24 年度以降についても継続できる様、努力することになった。体制に関しては、本取組と同時期に行われた「女性研究者支援プロジェクト」と事務体制を統合しつつ、特任教授 1 名と事務職員 1 名、ライティングセンター・チューター 3 名の体制の下に実務を行い、それを各学科の教員からなる関連委員会が支える形にある。こうした活動が学生に周知徹底され、学内における知名度向上がなされるためには、時間がかかるものであるが、本取組の土台は既に形成されているというべきであろう。

**教育の質向上に向けた改善計画:** 学生指導の大半を担う院生によるチューターの指導力向上は、本取組発展の要でもあるが、さらなる研修がなされ、指導の徹底が図られている。むろんこれには特任教授も加わり、講演会も学生のニーズに合った講師の選択をするように工夫が施され、その結果高い評判を獲得している。

**継続実施に当たっての課題・問題点:** 本取組が先鞭をつけた学生指導型のプロジェクトは本取組終了後において他の外部資金である「就職支援推進プログラム」としては形を変えて引き継がれており、指導力育成という本取組の視点は継続しているといえる。またライティングセンター自身も設置後日数が経つにつれてその存在感が増し、学内で必要とされるに至っているが、限られた予算の中で、今までのような充実した活動をどの程度維持できるかが今後の課題である。

## 2. 取組の全体像【1ページ以内】

取組名称：社会貢献は書く力とプロジェクト推進力から  
大学名：津田塾大学



### ○取組概要



日本語を書く力を備え、プロジェクト推進力のある、社会に貢献できる女性を育成する。

### 取組の内容

「書く力」に裏打ちされたコミュニケーション能力、さらに学生主導型プロジェクトの企画・運営を通してリーダーシップ能力を養成し、実践的総合キャリア教育を推進する。

### ポイント

#### ●ライティングセンター

**書く力**  
を養成

- ・個別相談
- ・連続講演会
- ・日本語ライティング講座

#### ●学生主導型プロジェクト

**プロジェクト推進力**  
を養成

- ・座談会や講演会の企画・実施
- ・イベントレポート

社会に  
貢献で  
きるリー  
ダーシ  
ップ

### 取組の成果・学内外からの評価

#### ●「書くということと私」連続講演会

講師は歌人、作家、新聞記者、書籍編集者ら「書く」ことを仕事にしているさまざまな分野の職業人。全19回開催、1300名以上が参加した。「学生の参加者たちに『書く』という行為の職業上の可能性について、多角的に考える機会を与えた」(2009年度外部評価委員)。地域の人たちにも公開され「非常に感動した」「ためになった」と評価された。

#### ●日本語ライティング講座

全26講座開催。「詩のワークショップ」や「こなれた訳文を作ろう」など多彩な内容。「書けない、書けない、と思っていたが、まずは書いてみよう、と思えるようになった」(在学生アンケート)

#### ●学生相談

応じた相談は400件。センターに来たことで利用者のほぼ全員が「問題が解決した」と答えている。

#### ●学生主導型プロジェクト

全21件プロジェクト。職業をテーマにした座談会を実施したグループが、次年度にその記録を小冊子にするなど継続性のある発展型の企画もあり、「学生の『書く力』とプロジェクト推進力の養成が一定の成功を収めている」(2009年度外部評価委員)

#### ●授業

「日本語ライティング」6科目が新たに開設。定員20名の少人数クラスでキメの細かい指導を行っている。

### ライティングセンターとは？



設立は2008年11月。大学院生のチューターと教員が、学生からの相談に1対1で応じている。課題レポートや企画書、手紙などあらゆる文書の「読み手」を提供する。

添削指導はしない。「自立した書き手」を育てるために、書き手みずから問題点や修正法を見つけていけるよう、アドバイスしている。

書く力を磨くための講演会、講座なども開催。

### 今後の展開

<ライティングセンターの継続>「自立した書き手」を育て、「書く」力に裏打ちされたコミュニケーション能力やプロジェクト推進力を磨く機会を引き続き提供する。

<活動内容>学生相談、レクチャーシリーズ「女性のリーダーシップから学ぶ」及び「書くということと私」、講座「日本語ライティング講座」、正課授業科目「日本語ライティングA～F」を継続する。